

10. ——— 1965. *Systema Gentianinarum Novissimum*. Symb. Asahikaw. 1: 147-158.
 11. ——— and Y. Toyokuni 1976. *Symbola*

- Gentianologica* 2. Jour. Asahikawa Univ. 4: 181-3.
 12. Walter, T. 1788. *Flora Caroliniana*.

新発見あれこれ(2)

奥原 弘人

H. Okuhara : Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture(2)

1. ミサヤマチャヒキ *Helictotrichon Hideoi*
 の葉について大井氏の日本植物誌には新梢の葉は伸
 長し、長さ30cm以上に達してゆるく内曲し、径は
 1~2mm……稈の葉はやや扁平で、長さ5~10cm、
 幅2~3mm、とあり、保育社の原色日本植物図鑑下
 には、葉は長さ5~20cm、巾1~3mm、内巻き、と
 あるがこれらの点について以前から疑問をもってい
 たので昨年自生地において測定してみた。ここにそ
 れを報告する。

ミサヤマチャヒキは松本市三才山のものがタイプ
 標本となっているとのことで三才山地区を含め松本
 市の東部山地では広く各地で見られる。昨年これを
 測定したのは袴腰山頂の北東部(海拔1750m)の草
 原で、ここはこの草本の最も多い所である。測定の
 結果、新梢の葉は長さが20~35cm、幅5~9mm、稈
 の葉は長さが10~15cm、幅4~6mmであった。

このように文献の記載が実際より狭くなっている
 のは、イネ科の多くがそうであるように、この草本
 の葉も採集して持ち歩いていれば間もなく内巻きす
 る性質をもっているのだ、そのように内巻きしてから
 作った標本によって測定したからではないかと考
 えられる。

2. 上高地のタンポポ 上高地は陸の孤島というよ
 うな所であるから帰化植物の侵入が少く、セイヨウ
 タンポポもようやく近年駐車場の隅に僅か見られる
 ようになっただけである。在来のタンポポとしては
 小梨平と徳沢のキャンプ場にミヤマタンポポと外に
 一種珍しいタイプのものが見られる。上高地の位置
 する中信地方はエゾタンポポの分布域であるが、エ
 ゾタンポポとは次のように異っている。

頭花はエゾタンポポより小さい。総苞外片は卵状
 長楕円形で内片の1/2より短く、基部において多
 少開出して内片との間、外片相互の間に空間を生じ、
 2/3ほど上部において90°内外の角度で内曲し、先
 端は内片に接している。また中部から上は中肋部分

が内外に肥厚して横断面が横広の菱形となり、外面
 は濃緑色となっている。花が終ると多少この形はく
 ずれるが全く消えることはない。この形はこの溪谷
 で分化した形と考えられるので一応カミコウチタン
 ポポ *T. kamikohchiense* として今後も観察を続け
 たい。

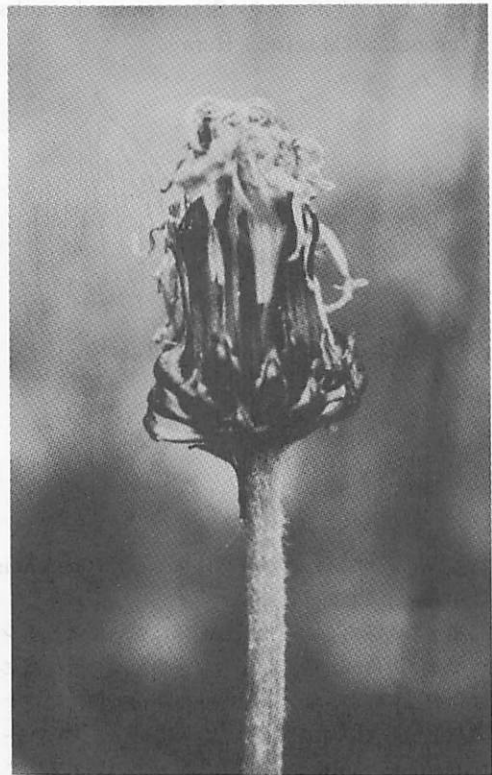
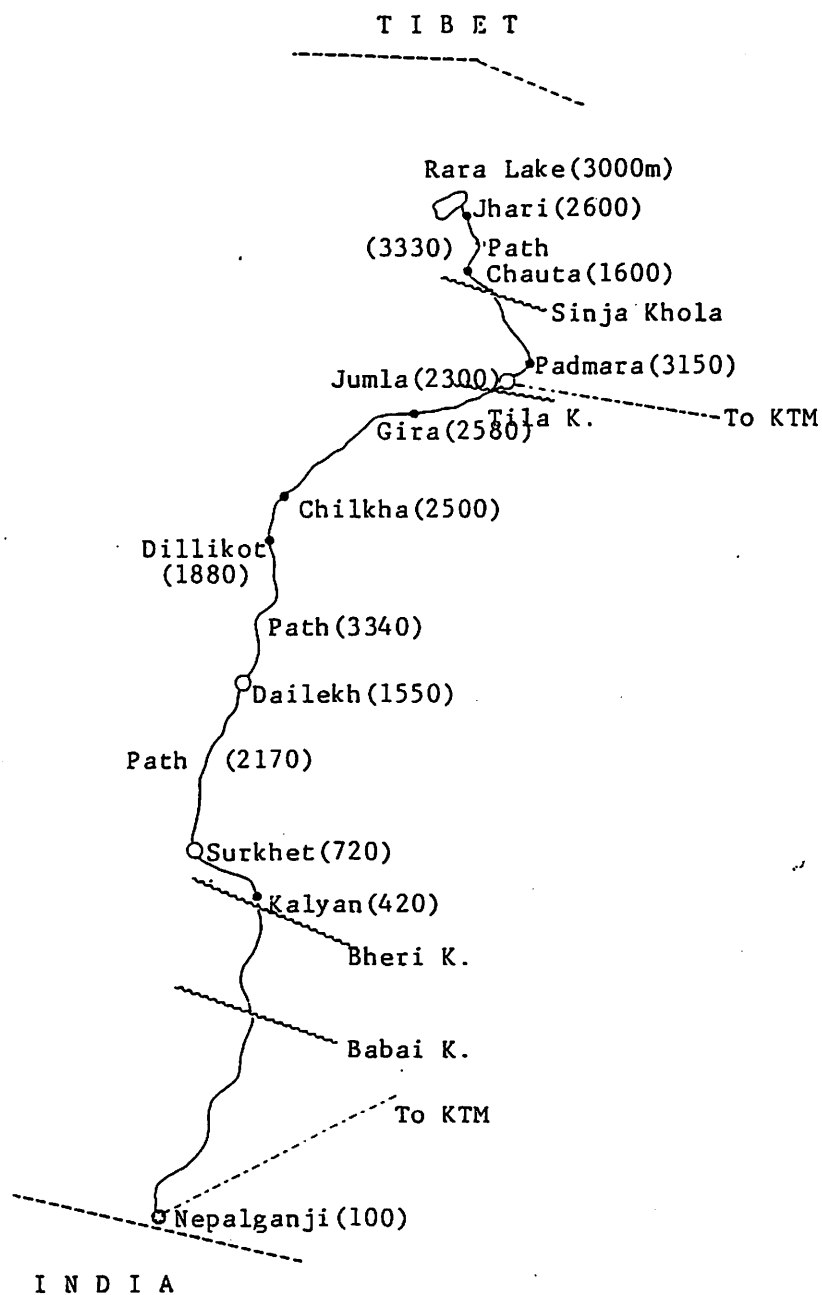


写真1 カミコウチタンポポ

3. ミヤマニワトコの色変り 上高地にはミヤマニ
 ワトコが多いが、中に花の黒紫色のものが二株あっ
 た。ニワトコにもこのような花色のものがあってク
 ロバナニワトコ(ムラサキニワトコ)と名がついて



Route Map of West Nepal Expedition in 1982
 (Jumla----Rara----Jumla---Nepalganji)
 () Altitude

いるので、これもクロバナミヤマニワトコの名で呼ぶこととしたい。なお木曽御岳にはミヤマニワトコの黄果品があったので秋の頃上高地へ行く方は注意していただきたい。

4. ヒカゲシラスゲ *C. mollicula* の変りもの 上高地の南部にはヒカゲシラスゲが多いが注意して見ると中には雌性小穂の先端に雄花をつけているのが見られる。このような小穂は1個体に1本のことが普通であるが明神岳の麓には3~4本ある雌性小穂の全部の先端に雄花をつけたものが20個体ほど群生していた。

これを見つけたのは昨1982年6月であるが翌月八ヶ岳の赤岳鉱泉附近でも、この形のものが多く見られたので、このようなものは他の地でも見られそうである。区別するため最初に気づいた上高地に因み新品種カミコウチシラスゲとして、その分布に注意したい。



写真2 カミコウチシラスゲ

5. アズマナルコ *C. shimidzensis* (ミヤマナルコ) は頂小穂1本だけが雌性または雌雄性であるというのが諸文献で見られる形である。しかし県下で普通見られるのは、このような形のものは稀で、上部の3本くらいが雌雄性となっているのが普通である。

この形のものを一応シナノナルコとして今後その分布を見ていきたい。

6. ムカゴオウシノケグサを見る 文献によればオウシノケグサは北海道・本州(北部・中部)の山地・高山ときには海岸にも生えているとあるが近年これが県内各地で急にふえているように見られる。これは平凡社の日本の野生植物で外国から移入されたものがあると述べているので、それからふえたものと考えられる。

ところで昨1982年秋松本市の女鳥羽川沿いで枯れたように見えるオウシノケグサの包穎の間から3~5cmの緑の新葉をのぼしているのが幾株も見つかった。この形は北海道にあるというムカゴオウシノケグサの形であると考えられるので今後各地での採集を期待したい。

7. ノコンギクの間種 1980年秋、紀州の椿温泉でヨメナに似たものを採り冠毛を見ると長さが0.5~2mmでヨメナよりは長く且つ不ぞろいであった。帰宅して間もなく松本市の自宅近くで見たユウガギクとみられるものも前者よりはやや短いが大体同じような冠毛をもったものであった。

この二品を北村先生にお願いしたところ前者はノコンギク×ヨメナ、後者はノコンギク×ユウガギクとのお答をいただいた。これらの間種は既に他でも知られているかどうか知ることは出来ないが、前者のようなものは県内にもありそうに思われるので、ご注意願いたい。

8. アザミの間種 本県にも南部にはヒダアザミとワタムキアザミが分布していることを北村先生のご同定で知ることができた。文献によればヒダアザミの根出葉は長柄があり全縁で小刺針があり……総包は幅1.5~2cm、ワタムキアザミの根出葉は葉柄がなく深く羽裂し……総包の幅は1cm内外とある。ところが木曽郡大桑村野尻向にあるものは根出葉に長柄があるうえに羽状に深裂していて前記両種の特徴を寄せ合わせたような形になっている。総包の大きさも両種の中間である。標本をご覧の清水会長からも両種の間種ではないかとのご指摘をいただいたので一応これをオオクワアザミの名のもとに今後とも観察を続けたい。

9. カミコウチアザミについて 上高地で見たアズマアザミ×ノリクアザミとみられるものを本誌11号にカミコウチアザミとして報告したが、先日ご書翰を整理していて同じものを既に北村先生にご覧願っていたことが分かった。それは1970年に上伊那郡飯島町の与田切川上流で採りアズマアザミ

ミ×ノリクラアザミではないかとお尋ねして、その通りとのお答をいただいてあった。その際木曽郡木祖村枯尾国有林で採ったナンブアザミ×ノリクラアザミとみられるものもご覧願ってあった。この二件を失念して北村先生に対し大へん礼を失した点を深くお詫び申し上げます。

10 マルバノキの新産地について 一昨年堤久氏が中房国有林でマルバノキを見つけたことを本誌15号で報告されたが、ここは既知の分布域から遠くとんでいるのと株数が少数であることから、これは植えられたものではないかとの疑問がもたれた。そこで昨年秋齊藤定美氏の協力を得て現地を調べることができた。



写真3 アブラシロモジ

そこは中房温泉に通じる県道から中房川支流の黒川沢へ100～200mはいった地点で、この沢の左岸に16株、右岸に6株を確認することができ現地の状況からみて植えたものとは考えられず自生であることを確認した。堤氏は花を見たと言っているが、この秋は果実は見られなかった。ここは落葉樹の茂った狭い谷間であるから開花も結果も少ないものと考えられ幼木も見られなかった。注目すべき産地であるから絶滅しないよう営林署その他の保護を強く期待したい。

11. オオクボシダの新産地 昨1982年9月前に述べたマルバノキを調査に行った際中房国有林でオオクボシダを見つけた。このシダはコケシダの名もあ

るように日本産のシダ類の中では最小とされているが中房溪谷のものは葉長10～25mmと特に小さく且つ毛が目立って見えた。

日本シダの会企画の日本のシダ植物図鑑によれば、このシダは太平洋側の各地に広く分布しているが日本海側には全然見られない。北限は茨城県北部となっているので中房溪谷の産地は緯度の上ではそれに及ばないが県内での北限とみられている辰野町からは45kmほど北に離れ、且つ日本海河川の信濃川の上流で北アルプスの山中という寒冷地である点で注目すべき産地とみられる。

12. シロモジ *Parabenzoia trilobum* の間種

シロモジは西日本に分布している低木で長野県では伊那谷の南西部で見られ木曽谷でも木曽福島町から南では広く各地に分布していて、この地方では少しも珍しいものではないが、北では鳥居峠にとんでその南西斜面に20株余の群生地がある。

ところでアブラチャンとシロモジとの間種とみられるものを発見したのは鳥居峠で1971年6月のことでアブラシロモジの和名を用意し前川先生にご覧いただいたこともあった。それから10年後の昨年見たところでは周囲の高木が生長して、それにやや負けながら競いあっているように見られたが、これが両種の間種であるとの確信に变りはなかった。

シロモジの枝は太めでやや直立型、葉は上部で三裂するのに対しアブラチャンの枝は細めでやや横に開き葉は全縁であるが、この間種とみられるものは枝の状態がその中間で葉には三裂、全縁のほかに二裂もあり、それが同じ枝に混ってついている。この二裂というタイプは両種の間種ということによって生れたものであろう。なおこの三裂の葉もシロモジに比べ幅が狭く裂けめが浅いのはアブラチャンの影響によるものであろう。ここは両種の混生地であるから間種の生れる条件はそろっている。

なお、この間種の学名は *Lindera × paratri-loba* としたい。